

“鉄と鋼”をより魅力あるものに

随 想
⇒⇒⇒⇒⇒

田 中 良 平*



皆さん、今月号の“鉄と鋼”を手にとられて、「何か変わったな」とお感じでしょう。目次を開け、本文のページをめくって、「大分変えたな」とお気付きでしょうか？ いかがでしょう、こういう編集の仕方は？

「“鉄と鋼”の論文は専門的過ぎる」と言われて来ました。「こんなむづかしい論文を何人が読むのだろうか」と聞かれたこともありました。

そして、「金属学会のように会報と会誌の2本立てにすべきだ」という議論も再三伺いました。

編集委員会の和文会誌分科会では、何度かこれらの問題を議論して来ました。もちろん論文集と会報誌のように分けて刊行することも真剣に考えて来ました。そして、学会誌というものの“あるべき姿”とはどういうことかが議論されました。

現在の学協会の機関誌がオリジナルな研究論文を発表する場として果たしている機能はまことに大きいものがあり、これを否定することはできません。しかし、多くの研究はそれが発展するにつれて狭く深くつき進んでゆくことは当然であり、それ故に自分の専門分野から少しずれると、論文を読んでも簡単には理解しにくくなることも起こりがちでしょう。したがって、1つの論文を一体何人の人が読んでいるだろうかという疑問もわいてくるわけでありましょう。

そのために論文集を別冊として、希望者だけが購読すればよいという発想も当然であります。

実際に日本金属学会は昭和37年から会報と、会誌すなわち論文集とに分けることを実施しており、日本物理学会も昭和21年にオリジナルな研究報告を含まない日本物理学会誌を創刊しております。またさらにさかのぼれば、日本機械学会は昭和10年から論文集を分けていますが、昭和9年の理事会議事録の中に、「現行の状態においては難解なる原著論文の頁多く、一般会員には読まれない部分も少なくない嫌いがある故、これを改善して近寄りやすきものとなしたし」という主旨で編修理事より改善案が出されていることが記されています。

さらに内外のいくつかの学協会の実情も調べましたが、比較的最近に論文集を分離したところでは、編集の仕事量の増加に加えて、経費面でも予想以上に高くつくことがわかりました。

これらのことを踏まえながら、和文会誌分科会の中で何回かにわたって議論が繰り返されました。昭和50年、松下委員長の時代でした。

結論として、当分は2冊に分けないで行こうということになりました。その主な理由は、業務を担当する編集課の仕事が2冊にすれば倍加するということがあり、またとくに編集委員の負担も容易ではないということでもありました。

和文会誌分科会の編集委員は最近はかなりの方々にお願ひし、昭和55年10月現在では42名に達していますが、そのうち大学・国立研究所の関係者は18名、会社関係者は24名であり、数名の方々は地方からもその都度上京していただいておりますが、大部分は東京近郊の方々であります。大学・研究所の方々も含め、ただでさえ忙しい本務の時間を割いていただいているのに、これをさらに二つの分科会に分けて現在以上の仕事をお願いできるだろうかということでもありました。

それよりも、“鉄と鋼”を今の1冊のままで、会員の方々に今まで以上に読んでもらえる、親しんでも

* 本会編集委員長 東京工業大学教授 工博

らえる編集の仕方があるのではないか、その方法を模索し、実行しようではないかということになりました。

すなわち、①論文誌と会報誌とに分離せず、現行通りの総合誌とする ②多数の会員の希望に沿った啓蒙記事の充実をはかる、の2点を前提条件としていくつかの改善策を打ち出しました。そして、論文・技術報告以外のいわゆる“その他の記事”を積極的に開拓するため、分科会内に編集小委員会を常設し、“その他の記事”の企画立案に当たることにしました。昭和52年の春、長嶋委員長の時代でした。

このような方向で数年間を経過しましたが、昭和55年に入つてこの問題が再燃し、現行の総合誌のままながら抜本的な改革を行うことになりました。その主な内容は

① 現在2～3編(15ページ程度)である技術資料、解説、技術トピックス、海外だより、随想のページ(会報ページと呼ぶ)を最終的に6～8編(30～40ページ)にしだいに増加していく。

適当な時期を設定し、掲載順序、体裁、内容を変更し、イメージを変える。その時期は56年1月からとするのが適当。これに対応するために以下の組織の変更が必要となる。

1) さしあつて従来編集小委員会の構成を拡大するとともに、和文誌分科会委員全員より記事の推薦を受ける。

2) 56年1号を目標に、相当数の委員より成る会報ページ編集委員会を55年中期までに設置する。

② 記事内容、体裁の変更

1) 論文ページを後半に、会報ページを前半に置く。

2) 内容を“鉄と鋼”にとらわれないで、広く幅を持つたものにする。

3) 平易な題名、カット、著者の写真などを考える。

4) 談話室、統計資料、用語解説、実験技術のような半ページ以下のコラムを置く。

5) 広告を含む記事が書けるページを置く。

6) 雑誌の背中に発行年によつて区別できるバンドおよび収納されているページを記載する。

7) 編集後記をつける。

8) 年1回、広告の索引をつける。

9) 特集号やシリーズ的な読みものを企画する。

これらの改革案は十分な審議を尽して結論を見たもので、さしあつてできるものから実行に移すことになりましたが、とくに②1)の「論文ページを後半に、会報ページを前半に置く」ことは本誌の体裁を大きく変えることとなりますので、1号からスタートするのがよいという意見が強く、56年の1号つまり今月号から実行に移したという次第であります。

最近、どこの学協会でも会員数の伸び悩みが憂慮されております。同年代の青年の37%が大学に進むという昨今であります。金属関係だけでも毎年全国で1800名前後の学士、修士、あるいは少数ながら博士も巣立つて行くはずであるのに、鉄鋼協会でも金属学会でも会員数の増加は停滞しているようです。社団法人として認められている金属関係の学協会が12もあるからかとも考えられますが、それだけではもちろんありません。

日本鉄鋼協会をより魅力あるものにし、優秀な先輩技術者、研究者はもとより、毎年社会の仲間入りをするジュニアの研究者、技術者を引きつけて協会を発展させるためには、協会の“顔”である“鉄と鋼”をより魅力あるものにする必要があります。

本号を第1歩として踏み出した新しい編集方法は、しばらくの間続くことになりましょう。和文誌分科会委員および編集課の方々のご尽力に感謝するとともに、会員の皆様方のご批判、ご叱正あるいは建設的なご意見などをいただきたいと存じます。